



第17号：平成27年10月13日 中村芳中 —— 2

芳中を「琳派」の一員に加えることに懸念する人も少なくなってきた。彼の描線を見ると柔らかく、伸び伸びとしている。同時代の「江戸琳派」の創始者である酒井抱一の描線と比べれば一目瞭然である。抱一の線の質は固く、京の写生派の代表者であった円山応挙の描線と同質、正確無比である。芳中の線とは全く性格が異なっている。なぜ異なるのか、一言で云えば芳中が写生嫌いであったのではないかと云うことになる。芳中は物の形態に拘らなかったが、抱一は形態に拘った伊藤若冲の昆虫を自らの画面に取り込んでいる。断っておかねばならないのは、「琳派」が写生をしなかったということではないことである。梅花を五弁に表現せねばならないと云う堅苦しい考えに縛られない自由を「琳派」はもっていた。単純に丸い円でも梅花である、と見る人が認めてくれればそれでよい、と芳中は考えたに過ぎない。